

様式第 2 (第12条関係)

加入国際学術団体に関する調査票

1 国際学術団体活動状況 (内規第 11 条 活動報告)

団体名	和	国際科学史技術史・科学基礎論連合/科学基礎論部門
	英	International Union of the History and Philosophy of Science and Technology/ Division of Logic, Methodology and Philosophy of Science and Technology (略称 IUHPST/DLMPST)
	団体 HP (URL)	(日本学術会議が加盟していることの記載 ・ 有) (http://www.dlmpst.org/pages/members.php において日本学術会議の加盟関係が表わされている)
国際学術団体における最近のトピックについて (学術の進歩、当該団体の推進体制の変化、国際機関・政府・社会との関わり方等)	<p>IUHPST/DLMPST は、論理学、科学・技術基礎論、科学・技術哲学、科学・技術方法論分野の国際組織であり、1949 年に設立された International Union of Philosophy of Science (IUPS) を前身としている。IUPS は 1956 年に、ICSU に加盟するためにすでに ICSU に加盟していた International Union of History of Science (IUHS) と IUHPS を形作り、両者を二つの Division と称することになった (IUHPS/DLMPST と IUHPS/DHS)。現在 UNESCO 学術国際学会連合組織は ICSU を前身とする ISC と、人文諸科学を統括する CIPSH の二つの組織からなるが、DLMPST は CIPSH に対しては (DHST と同様に) Union としてではなく、独立な直接のメンバーとして所属している。</p> <p>DLMPST の主要分野「論理」が現代社会にとって重要であることが認められ、DLMPST と CIPSH の提案により 2019 年 UNESCO 会議において、毎年 1 月 14 日が「世界論理デー」と制定された。分科会関連分野が UNESCO 世界デーとなるのは極めて稀である。学術基礎の論理研究、民間産業への広範囲の応用、合理的思考の教育・不一致克服に相互理解の教育、合理的政策決定などに果たす「論理」役割が認識されたことを意味し、「論理」とこれに関わる科学・技術基礎論の提言・提案・行事が「世界論理デー」を中心に毎年 DLMPST 及び所属諸国で発表される予定である。このことは DLMPST 分野の社会的重要性を示す一例と言える。DLMPST はこの一例でも示されるように、上位組織である CIPSH, ISC, 及び UNESCO 本部などと特に密接な連携・協力関係を取りながら、社会と関わっている。</p> <p>科学の技術との結びつきの強化、社会的影響の増大、工学の独自性の再認識、生命科学技術と現代社会との関りの深まりなどを踏まえ、2015 年から、IUHPS, DLMPST に Technology の語を付し、IUHPST/DLMPST と名称が変更された (DHS は 2013 年から T を付加)。</p> <p>DLMPST と DHST は科学・技術という共通の研究対象をもつため、緩やかに連携しているが、DLMPST が現代の科学・技術の基礎及びそれらに関わる哲学・論理的分析を行う現代の理論</p>	

様式第 2 (第12条関係)

的及び社会的諸問題を研究対象の中心としているのに対して、DHST は科学・技術各分野の歴史を研究対象の中心としており、研究対象分野の重複が（例外の一部を除いて）ない。CIPSH で独立な別メンバーとして所属し、DLMPST が CIPSH 内で重要な役割を果たしていることも、このことを示している。DLMPST が科学・技術哲学者、論理学者の他に、数学、計算機科学、物理学、生物・生命科学など諸科学の基礎や社会的諸問題を扱う科学者も含むのに対し、DHST は主に科学史研究者からなり、ほとんど重なっていない。そのため、両者は IUHPST の Division とはいうものの、総会や分科会など独立の組織と財政をもち、委員会も運営も予算・会計も全く独立に行っている。

DLMPST は、科学・技術の進歩で見落とされやすい研究の方法論や理論の基礎及びその哲学・倫理的側面の研究対象としている。科学・技術が人間の生活環境や社会にこれまでにない速度で変化をもたらしている。この中で、科学・技術哲学、論理学・知識哲学、科学・技術方法論の研究は、人や社会と科学・技術の新しい関係を検討するうえで欠かせない分野と言える。DLMPST の最大の特徴と言える文理融合的研究手法は現代社会が直面する科学・技術の諸課題の解決に重要な役割を担っている。DLMPST が現代自然科学系の側面と現代人文科学系の側面の両側面を持っていることは、ISC 諸分野全体および CIPSH 諸分野全体の中でも特記に値する最大の特徴である。DLMPST の主要分野の一つである論理学は、紀元前に既に形式論理として最初に定式化された学術分野であると言えるが、20 世紀前半の現代コンピュータの理論モデルの誕生にも直接関わった分野でもあった。科学・技術の方法論・基礎論としても、人間の思考の基礎論としても、また、相互理解・不一致の克服の基礎研究理論としても、DLMPST 分野は重要な役割を果たしている。UNESCO 「World Logic Day」の制定もこのことを物語っている。

上記のように DLMPST の研究分野は、現代の科学技術的側面を統括する ISC と、人文科学的側面を統括する CIPSH との両側面に広範囲に関わっている。従って、DLMPST は ISC と CIPSH を繋ぐ重要な役割を担っていると言える。

DLMPST は総会・コンGRESを4年に1回開催し国際規模の研究交流を進めてきている。最新の総会は2019年にプラハで開催された。「異なる学術文化を架橋する」を大会テーマとした。

この統一テーマによって意図されていたのは、第一に、DLMPST の中心を成す学術分野（論理学並びに科学と技術の哲学）がこれまで歴史的に担ってきた重要な役割——自然科学・

様式第 2 (第12条関係)

	<p>人文科学・社会科学という異なった3つの文化をまさに「架橋する」こと——を改めて強く意識し、その一層の発展を目指すことであった。この時のプログラムは、純粹論理学4分野、諸科学哲学7分野、論理・科学・技術哲学個別的問題9分野の3本柱、全20グループであった。コンgress・総会報告は毎回開催後に Mathematical logic Quarterly から出版されている。より詳しい研究集会の Proceedings として、『<i>Logic, Methodology and Philosophy of Science: Proceedings of the International Congress for Logic, Methodology, and Philosophy of Science</i>』を刊行している。このシリーズは、論理学、科学基礎論、科学哲学分野での最も定評ある論文選の一つとなっている。2023年の総会・コンgressはブエノスアイレスで開催される。2027年の総会・コンgressは日本開催が期待されている。(プラハ Council Meeting では、事務総長から、日本に対する2027年大会招致提案提出への強い期待が表明された。)</p>
<p>政策提言や世界の潮流になりそうな研究テーマ・研究方式・研究助成方式等について</p>	<p>新しい科学・技術が日常の我々の生活環境や社会に直接的で急激に影響を与えている中で、様々な現象をいかに概念的に把握し、分析するかという課題は、国際的にも大きな関心を持たれているテーマである。</p> <p>このような潮流の研究テーマの一つを選んで、DLMPST 主催シンポジウムが2020年東京で開催される。DLMPST 分野の日本の学協会(科学基礎論学会)とも連携して行われる。我々の生活を取り巻く新たな情報処理・ネットワーク・機械学習環境の、公平性・誠実性・透明性の問題を検討する。科学・技術哲学、科学・技術倫理、論理、情報科学基礎論をはじめとする文理融合課題の提言に向けてのDLMPST プロジェクトである。このテーマのシンポジウム開催地としてDLMPST Council は特に日本が最適地であると考え、日本開催となった。哲学系分科会の戸田山委員らの関係者も企画に加わっている。このシンポジウムテーマが示している通り、DLMPST 分野は、進展する科学・技術だけではしばしば見逃される、基盤的概念のレベルの基礎研究や人間・社会との関わりの観点の補完的研究を文理融合的視点から行い、政策提言に関わることを最大の特徴としている。DLMPST は特に日本との連携研究を進めることにしている。</p> <p>DLMPST には small conferences 助成制度、Summer School 参加者支援、Congress 支援、集中研究テーマ Commissions 支援など多様な支援制度を設けており、EU や各国研究助成機関にはDLMPST 分野の助成制度が存在する。</p> <p>DLMPST 及び上位組織 CIPSH との提案により、ユネスコ「世界論理デー」が2019年に制定された。学術・産業・教育の広い範囲にわたりDLMPST の中心的方法論である「論理」の活用</p>

様式第 2 (第12条関係)

	<p>が UNESCO 会議で推奨されている。知識科学や知識共有、人の相互理解や論理的思考の教育法などまで、科学技術分野、人文・社会科学分野を含む広い分野で、DLMPST が中心となって「論理」の社会貢献を推進されていることが認められた。</p> <p>近年、DLMPST は科学教育を通じた市民の科学リテラシーの向上や、科学者の育成（科学者教育）において、論理学、方法論、科学技術の哲学が重要な役割を果たしうるという認識の下、この方面での活動を活発化させている。ヘルシンキ大会では、これに関して「ヘルシンキ宣言(The Helsinki Manifesto)」を採択した。その第 2 条で、「論理学、方法論、科学哲学は、高等学校、大学のカリキュラムに組み込まれるべきである。地域単位、国単位の活動はこの統合を導くべきである」と指摘している。</p> <p>これに関連して、科学哲学・科学史の科学教育への応用について国際比較の観点から『<i>International Handbook of Research in History, Philosophy and Science Teaching</i>』、全 76 章総ページ数約 2500 ページにわたるきわめて包括的なハンドブックを出版（電子出版）した。出版からヘルシンキ大会までの間にすでに 76000 チャプターがダウンロードされており、各国において、科学哲学・科学史の導入による科学教育の質向上を進めていく際の、重要な基礎文献になっている。</p> <p>DLMPST は会員からの申請に基づき、毎年 5～10 件程度の小規模な研究集会に財政的援助を行っている。2014 年には、自然言語処理の数学理論、論理学の哲学への応用、計算の複雑さの理論、科学への市民参画と科学政策等、計 8 件の国際研究集会に助成が行われた。2017 年には 3 件、本年 2018 年には 2019 年開催予定も含めて 6 件の援助を決めている。こうした助成方式が研究活動の活発化に有効であるとみられる。</p> <p>DLMPST は 4 年に 1 回のコンGRESの他の年に DLMPST 主催会議の特定テーマの会議を開催している。2015 年ヘルシンキコンGRESと 2019 年プラハコンGRESの中間年の 2017 年はザルツブルグで Global Perspectives on Reasoning and Scientific Method のテーマで行われた。（日本からも招待講演者を一名出ている。）このほか、毎年、サマースクール又はシンポジウムを主催している。2020 年の DLMPST シンポジウムは 11 月に東京で開催される。</p>
<p>日本人役員によるイニシアティブ事項や日本からの参加によって進展や成果があったものについて</p>	<p>1. DLMPST の Council は Executive Committee (6 名) と Assessor (6 名以上、現在 8 名) からなり、それぞれ総会で選挙により選出される。2016 年から 2019 年の Assessor として、日本人会員の岡田光弘氏、2012 年から 2015 年の Assessor として、八杉満利子氏が就任している。役員会は 4 年に 1 回の総会時に 3 回行われるほか、4 年に 1 回</p>

様式第 2 (第12条関係)

	<p>の総会年の中間にあたる総会 2 年後に一回行われる。2015 年 Helsinki 総会と 2019 年 Praha 総会の中間年 2017 年に Salzburg で役員会が開催された。</p> <p>2. 岡田委員は DLMPST 委員として 2019 年に、(DLMPST の上位団体に当たる) CIPSH 委員会と CIPSH 選任委員評議会及び公開コンフェレンスの 2021 年開催に向けた準備活動を行い、CIPSH における DLMPST のプレゼンスの向上に貢献した。2021 年度末に CIPSH 選任委員評議会が東京で開催される予定となっている。関連日本学協会との連携、哲学系分科会戸田山や哲学系分科会連携委員納富らと進めた。会議準備段階で、今後、人文系諸分科会、国内関連学協会などとの連携も進めていく予定にしている。DLMPST 事務総長が推薦者、DLMPST 日本側委員岡田が代表となり、日本側哲学分科会戸田山委員及び DLMPST 関連学協会の複数の理事長・理事らがこの準備に加わった。(なお、2017 年にベルギーで開催された前回の CIPSH 選任評議委員会及び併設コンファレンスでは、日本学術会議会長が基調講演を行い、評議委員会と同様な重要性を持つ CIPSH 総会及び併設コンファレンスが 2010 年に日本で開催された時には、日本学術会議会長が開会の挨拶講演を行った。)</p> <p>3. DLMPST 岡田委員は 2019 年 DLMPST 総会のプログラム作成に大きな役割を果たした。特に、日本の次回総会・コンgres 招致提案を他の日本側 DLMPST 関係者や哲学分科会戸田山らと進め、2019 年プラハ総会の最重要議題であった次回 2023 年コンgres 協議で日本からは神戸招致提案を提出した。総会では、70 年間まだ総会を実現したことのなかった南半球からの提案 (南米アルゼンチン) に次回総会・コンgres 開催地が決まったが、日本への招致提案の質の高さと信頼性が高く評価され、2027 年の次回の最有力候補地とみなされており、Council Meeting では事務総長から日本に対する強い期待の言葉があった。(事務総長からは、現在米国だけである E-階級の国に日本もなっ、より大きな役割を果たすことはできないか、という打診もあったほどであり、日本への期待は高い状況にある。現在は一つ下の D-階級である。)</p> <p>4. DLMPST 岡田委員は、上部組織 ISC, CIPSH からも種々の依頼を受ける。CIPSH における日本委員のイニシアチブについては上に述べたとおりである。ISC からの伝達事項や依頼情報は DLMPST を経由して分科会 DLMPST 関係者に流している。DLMPST 委員自らが ISC に協力している一例としては、分科会 DLMPST 側の集中的テーマ課題である、新</p>
--	--

様式第 2 (第12条関係)

	<p>しい情報環境の科学・技術哲学的研究成果を応用し、Cybersecurity-Hazard-Classification 国連・ISC 共同プロジェクトに協力している。「科学・技術哲学、情報科学基礎論」及び「論理・オントロジー哲学分類手法」がこの国連・ISC プロジェクトに如何に直接的に応用可能であるかも示す機会となっている。</p> <p>5. 2017 年 Council Meeting では、日本代表としてだけではなく、東アジア地域唯一の委員という立場から DLMPST の合意形成に貢献した。また、併設 DLMPST 公開国際シンポジウムの招聘講演者として講演を行った。2018 年の DHST-Council Meeting には DLMPST の代表という立場でオブザーバ参加し、DLMPST-Council に会議内容を報告した。この他の役員会議は、メール持ち回り委員会の形で頻繁に行われているが、岡田光弘氏は DLMPST から DLMPST への組織正式名称変更、およびそれに伴う Technology 分野の DLMPST 内での位置づけに関する合意形成で、「技術」を組織名称に組み込み、DLMPST の主要な研究課題として位置づけるべきとの立場から発言し、重要な役割を担った。</p> <p>また、2019 年のプラハ大会では、プログラムの大枠の決定、基調講演と招待講演の人選、発表の審査などに寄与することによって、国際会議の実施および各セッションの研究発表や招待講演座長等、運営に貢献した。</p> <p>役員は東アジア地区からの唯一人の委員であり、東アジアの歴史的・社会的文脈を踏まえて重要決定事項の議論に加わることができるのは重要である。また、論理学、科学基礎論、科学技術哲学分野における、我が国の国際的プレゼンスを高める点でも、コンスタントに委員を送り込んでいることは意義がある。</p> <p>加えて、ハンドブック『<i>International Handbook of Research in History, Philosophy and Science Teaching</i>』(2014) には、日本における現状の報告として、村上祐子氏と隅田学氏による「History and Philosophy of Science in Japanese Education」が掲載され、網羅性と国際性を高めることにより、ハンドブックの実践的価値の向上に寄与した。</p>
<p>加入していることによる日本学術会議、学会、日本国民への変化やメリットについて</p>	<p>IUHPST/DLMPST に加入し、日本人の役員をコンスタントに派遣することにより、国際会議の運営に関与し、論理学、科学・技術哲学の分野における日本の存在感を高め、日本の当該分野の研究者のレベルアップをもたらしてきた。その効果は、以下のように、日本学術会議、学会、日本国民に波及するものである。</p> <p>2018 年-2019 年の DLMPST 総会・コンGRESS 招致国内委員会設置や国内の本分野の招致活動へのコミットメント、2020 年</p>

様式第 2 (第12条関係)

DLMPST 東京シンポジウムへの広範囲の日本研究者や学協会のコミットメント、人文諸科学分野の CIPSH 評議会日本開催へのコミットメントおよび関連公開コンファレンスコミットメントなど多くの新たな日本のコミットメントが挙げられる。

【日本学術会議への効果】

日本学術会議は ISC への直接所属はできるものの、人文科学分野を統括する CIPSH には、(CIPSH 制度が国別のメンバーを認めていない制度であるため)直接所属することが出来ない状態にある。日本の DLMPST 関係者の特殊な立場は、CIPSH の評議会と店綱関係を有すると同時に、人文科学系諸分科会を含む日本学術会議とも密接な連携関係を有するので、CIPSH 役員会と日本学術振興会各分野委員との交流を支援することができる立場にある。

日本学術会議では既存の各分野に関する諸問題に関してだけでなく、複数の分野にまたがったり、科学技術と社会との境界面で生じる問題について議論が行われ、提言等が発出されてきた。たとえば、ますます国民的・国際的な課題となっている科学・技術関連の諸問題 (2020 年の DLMPST 東京シンポジウムで取り扱う、新たな機械学習環境における公平性の問題、フェイクニュースやプライバシーとセキュリティの両立への問題など)、原子力・原発問題、医療技術と生命倫理、学術情報の流通(オープンアクセス、Overlay journal platform 研究)、ビッグデータと科学研究、科学技術政策への国民参画、人工知能技術と人間的価値の調和等々の問題は、日本学術会議に取り組みが期待されている課題である。しかも、これらの課題は決して一国内に閉じた問題ではなく、国際的に共通した課題であり、国際的協調の下に解決が望まれる。

上記のように、DLMPST は近年、こうした科学・技術と社会・倫理との関係について取り組みを強化してきている。たとえば、近年の大会では Ethical and Political Issues in the Philosophy of Science という分科会が設置されている。また、医療の問題を考える研究集会にも、資金援助がなされるようになってきた。2019 年に DLMPST で組織委員会を結成し準備を進めている 2020 年 DLMPST 東京シンポジウム(DLMPST 分野の国内学協会である科学基礎論学会との共催)もこのような流れの最も最先端の DLMPST プロジェクトの一つと言える。機械学習・ビッグデータ・ネットワークを含む新しいアルゴリズム・プログラム環境の公平性・誠実性・透明性・説明性の諸問題を DLMPST ならではの文理融合的専門研究により議論し、さらに関連する諸分科会と連携していくことを目指している。

DLMPST に加入し、分野と国境を越えた研究者交流を進め

様式第2 (第12条関係)

てきた結果、日本国内の論理学、科学基礎論、科学哲学分野の研究者は、原理的理論的問題のみに関わるのではなく、科学・技術と社会との界面で生じているこれらの諸問題の解決に積極的に貢献しようとする姿勢を示すようになってきた。DLMPST への参加を通じて形成した国際的ネットワークを活かし、海外での最新の研究状況、活動状況を日本学術会議の研究者横断的、メタ科学的な議論に反映させることにより、日本学術会議の議論の活性化をもたらすことができる。

【学会への効果】

DLMPST の組織運営に関与することで、学術研究集会のテーマや研究すべき課題が、世界各国の研究者からの個別提起だけでなく国際的レベルでの課題を受け取り、あるいは日本から問題提起することが緊密にできる（たとえばプログラム構成等を通じて）。このことは、日本における関連諸学会（科学基礎論学会、科学哲学会）での研究レベルに直接反映するものであり、国際研究組織の運営に関与できることは関連学会にとって大きなメリットがある。

逆に、日本国内の研究成果を対外的に広め、国際的な研究活動の一翼を担い、国際的に影響を及ぼすことができるのも組織加盟していることによるところが大きい。とりわけ、数理論理学および物理学の哲学や生物学の哲学のような分野においては、日本にはそのための専門学会が存在しない。DLMPST への加入は、日本での当該分野における研究の国際水準的活動を進めていく活動母体としての大きな意味をもっている。

近年、日本、台湾、中国、韓国等、東アジアの科学哲学者の間に共同研究の機運が高まっている。たとえば、2012年を皮切りに、隔年で台北、京都、ソウルにおいて「東アジア現代哲学会」が開催されるようになったが、日本側の主たるメンバーは科学哲学者、論理学者である。ともに欧米の科学哲学を学んだ者であるが、東アジアの国々には、科学技術が比較的新しい時期に導入され、急速な近代化と産業化の資源となってきたという共通かつ独自の特徴がある。「東アジアの視点で見た科学技術」の研究は今後とも重要である。DLMPST は、2013年に台湾で開催された、「第3回東アジア科学哲学会議」を助成しており、DLMPST に加盟していることは、日本国内のみならず、東アジアを舞台とした国際的学会活動の活性化にも寄与する。

【日本国民への効果】

DLMPST の主要分野「論理」が現代社会にとって重要であることが認められ、DLMPST と CIPSH の提案により、UNESCO「世界論理デー」と制定された。分科会関連分野の学術成果が基盤となり UNESCO 世界デーを制定するのは極めて稀である。このこ

様式第 2 (第12条関係)

とは DLMPST 分野の社会的重要性を示す一例と言える。DLMPST はこの一例でも示されているように、「論理」をはじめとする DLMPST 分野は、人の相互理解や論理的思考や情報科学応用をはじめとして、直接的・間接的に国民の生活に貢献している。

論理学、科学基礎論、科学哲学分野の研究者が、日本学術会議での議論等を通じて、科学・技術と社会との境界面で生じているこれらの諸問題の解決に積極的に貢献することで、ひいては日本国民全体に貢献することができるのは言うまでもないが、ここでとりわけ重要なのは、科学教育への貢献である。

ハンドブックの刊行やヘルシンキ宣言に見るように、DLMPST は科学教育の質向上を国際的課題と位置づけ、それに取り組むようになってきている。そして、その潮流には日本からの参加者も大きく貢献してきた。論理学、方法論、科学哲学の科学教育への導入は、科学教育を科学者育成として見た場合には、科学者に自らの分野を俯瞰する力、科学の倫理的、社会的、価値的問題への理解を涵養することになる。科学技術者が科学技術の社会全体への影響を考慮に入れながら、研究開発を進めることにより、科学技術はより国民全体の福利に資するものとなるだろう。

また、科学教育を市民の科学リテラシー育成として見た場合には、論理学、方法論、科学哲学の科学教育への導入は、断片的知識の受容ではなく、科学とはいかなる活動であり、社会にいかなる影響をもたらさうかについての総体的な理解を涵養し、科学に対する基本的信頼感を醸成するものとなる。東日本大震災直後に閣議決定された「第4期科学技術基本計画」においては、科学技術政策の企画立案および推進への国民参画が謳われていたが、いまだに十分に実現を見ていない。しかし、このためには、市民の科学リテラシーの向上が欠かせない。しかもそこで市民が知っておくべきことは、科学の断片的な知識というよりは、科学とはいかなる活動であるのか、なぜそれは信頼できるのか、どの程度信頼できるのか、科学はどのように進展していくのか等々についての知識、つまり科学についてのメタ的知識である。そして、科学基礎論、科学方法論、科学哲学、論理学がこうしたメタ科学的知識を明らかにし蓄積してきた分野であることは論を俟たない。

したがって、日本の科学基礎論、科学哲学研究者がヘルシンキ宣言に謳われた DLMPST の活動に積極的に参加することは、科学教育の質的向上と、市民の科学リテラシーの向上を通じて、市民社会と科学技術の良好な関係を構築することに大いに貢献する。

ハンドブックにおいて、日本における現状の報告を行った、村上氏は論理学者・科学哲学研究者、隅田氏は科学教育を専門としている。現在の日本におけるサイエンス・コミュニケーション

様式第 2 (第12条関係)

	<p>ヨンは、working scientist コミュニティ、科学哲学・科学史研究者コミュニティ、初等中等教育における科学教育に関する研究者とのコラボレーションが必ずしも活発ではない。こうしたハンドブック作成が、日本においても、縦割構造を改め、実り豊かなコラボレーションを開始する大きなきっかけになると考えられる。</p>
<p>その他 (若手研究者・女性研究者育成法、科学者の倫理に関する当該国際学術団体の基本方針や憲章、資金提供ソースの発掘における画期的な方策等の特記事項など)</p>	<p>研究者には科学・技術と社会との相互影響がおおきくなるにつれ、市民の科学リテラシーの向上が求められてきているが、教育過程においても論理学や方法論、科学哲学を組み入れることの重要性が前記ヘルシンキ宣言で謳われた。これは、複雑で多様な問題、横断的な問題を扱わなければならない現代および次世代の研究者、若手研究者においても極めて重要なことである。科学・技術分野の研究倫理・研究者倫理、科学・技術の利用に関する倫理は、そのこと自体が DLMPST 分野の研究分野の中に含まれており、2020 年に計画されている DLMPST シンポジウムもまさにこの側面も含む DLMPST の典型的アクティビティと言える。</p> <p>最近の大会では、現代課題としての統一的なテーマ設定とともに、研究者や課題の多様性の尊重が際だっていた。この多様性を重視する姿勢は、今後の研究の方向性を示唆するとともに、諸事を議論・処理する際の重要な視座になると思われる。制度的にも、多様な地域、多様な研究機関、多様な研究者の平等な立場からの研究交流の推進が、今後の世界やアジア、日本国内においても望まれる 2019 年 DLMPST コングレスには特に審査を経て、若手助成研究者を学会発表のために派遣した。複数の若手助成を含む若手研究者が研究発表を行った。2020 年の DLMPST 東京シンポジウムでは国際的第一線の女性研究者を招き、DLMPST 分野の日本の若手研究者達との学术交流の機会を設ける。このように、DLMPST の各学術行事で若手研究者、女性研究者の育成にも取り組んでいる。また、DLMPST と連携関係を持つ複数の学協会では本分科会 DLMPST 関係者も審査員に参加する形で、DLMPST 分野の若手研究者を対象とした優秀論文賞の審査・授賞を行っている。</p> <p>DLMPST では、定期的に POSTGRADUATE STUDENTS CONFERENCE を開催し、旅費資金援助も含む若手育成事業を進めている。直近では、2018 年 11 月に行われた。</p>

2 今後の予定について (内規第 11 条 活動報告)

<p>総会、理事会の日本開催の予定について (招致等の予定も含め)</p>	<p>1. DLMPST の 2020 年度の主要主催シンポジウムを日本の DLMPST 分野の学協会 (科学基礎論学会) と連携して主催することが、2019 年に CCLMPST-Executive Committee で決定、Organizing Committee を形成して準備を進めている。</p>
---------------------------------------	--

様式第 2 (第12条関係)

	<p>2020 年 11 月の開催を予定している。Fairness, Integrity, Transparency in Formal Systems; Challenges for a Society Increasingly Dominated by Technology (機械学習・ビッグデータなどを含む新たに直面している情報環境社会の情報処理システムの公平性などの諸問題の検討と提言)をテーマとする。現代社会に直結する科学・技術哲学、論理学の新分野の開拓の例と言える。</p> <p>2. 2022 年初頭に、DLMPST の UNESCO における上位団体の一つである CIPSH (人文諸科学評議会) の重要会議を日本で開催する。特に、DLMPST 代表の参加を含む、CIPSH 選出委員評議会 (Elected Executive Committee) を日本の DLMPST 側でホストし、CIPSH 中長期ゴールの決定という最重要課題を審議環境を支援する。同時に公開コンファレンスを日本で開催する。公開コンフェレンステーマ候補としては、「アジアにおける人文科学の再評価」「新しい時代の人文科学と自然科学・情報科学の関係」「人文科学固有の学術評価指標の検討」など、これからの人文諸科学を先導するテーマや CIPSH と ISC を結ぶテーマが挙げられている。</p> <p>3. DLMPST は DHST との間で Union を組む形で UNESCO-ISC のメンバーとなっていると同時に、UNESCO-CIPSH に対しては直接のメンバーとなっている。上で述べたように、DLMPST と CIPSH との提案により 2019 年 11 月の UNESCO 会議で、毎年 1 月 14 日が、UNESCO 「世界論理デー」と制定された。DLMPST は科学・技術を研究対象とする側面を持つと同時に、科学・技術の哲学・人文科学研究の側面を持ち、ISC と CIPSH を繋ぐ役割も期待されている。DLMPST を通じて、DLMPST 日本側は CIPSH-Executive Committee と密接に学術情報交流を行っており、上記 2 のように、CIPSH の最も重要な長期政策計画決定会議も日本で開催することとなった。また、上記 2 の期間中の CIPSH Elected Executive Committee 及び、CIPSH-DLMPST 公開コンフェレンス開催時期が UNESCO-World Logic Day とも隣接した時期になることから、UNESCO 本部との連携を通じて、2022 年 UNESCO World Logic Day 学術行事も日本で開催することになる可能性が高い状況にある。</p> <p>4. 次回の国際大会は、2023 年ブエノスアイレスが決定している。2019 年プラハ大会の総会で、日本とアルゼンチンが次回 2023 年大会の招致提案を行った。南半球では DLMPST の 70 年間の歴史上一度も総会・コンGRESSを開催したことがなかったことから、アルゼンチンを 2023 年大会地とすることとなった。(神戸 48 票、ブエノスアイレス 56 票)</p>
--	--

様式第 2 (第12条関係)

	<p>で敗れた。中堅国は 4 票保有しており、中堅国 1 国分の移動の差となった。) しかし、日本と他諸国との連携は深まり、DLMPST Council では、次回の日本からの招致に対する強い期待表明がなされた。</p>
<p>日本人の役員立候補等の予定について</p>	<p>2015 年-2019 年は岡田光弘が Executive Committee 委員を務めたのに続き、2019 年-2021 年は DLMPST シンポジウム組織委員を務める。2021 年末-2022 年初頭の CIPSH 選出役員会議開催支援の DLMPST 側担当者となっている。</p> <p>役員選出の第一ステップは、立候補制ではなく推薦制であるが、今後も日本から各種委員が選出されると予想される。近年の日本の DLMPST 総会及び DLMPST 主催シンポジウム招致活動や、DLMPST の UNESCO 上位組織である CIPSH 招致活動などを通じて、DLMPST 内における日本の役割の重要性が委員会内で認識されており、各種委員会への日本からの委員が着実に増えると予想される。</p>
<p>現在、検討中の日本からの提言や推進するプロジェクト等の動きについて</p>	<p>1. 2020 年 11 月 DLMPST 主催 (DLMPST 分野の日本側学協会である科学基礎論学会と連携) シンポジウム (11 月 15 日) における重要テーマの提言：</p> <p>「Fairness, integrity, transparency in Formal systems: Challenges for a Society Increasingly dominated by Technology」</p> <p>機械学習、ビッグデータ、人工知能、ネット環境に囲まれた社会のための、アルゴリズム・プログラムの公平性、誠実性、透明性の課題に対する、科学技術哲学・論理学によりチャレンジ。</p> <p>2. 2021 年末に、CIPSH (ユネスコ人文諸科学評議会) 選出委員会 (Elected Executive Committee) 及び 公開コンファレンスを DLMPST 及び分野関連学協会や関連機関とも連携して日本で開催する。CIPSH との話し合いの下で公開コンファレンスのテーマ及び提題を最終決定するが、現時点での候補のいくつかとしては、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. アジアと人文科学の関係の再評価 2. 新しい時代の人文科学と自然科学・情報科学の連携の関係にむけて 3. 人文科学固有の学術評価指標の検討 <p>が挙げられている。日本の DLMPST が CIPSH 及び国内人文諸科学分科会らと連携して提言、国際プロジェクト立案を行う。</p> <p>2019 年総会で次期総会・コンGRES の招致活動を行った。「新しい科学・技術環境社会と科学・技術哲学・論理の役割」についての提題を行った。次々回の総会・コンGRES の事実上の第一候補であることから、この提題内容をさらに具体化していく。</p>

様式第 2 (第12条関係)

3 国際学術団体会議開催状況 (内規第 11 条 活動報告)

総会・ 理事会・各 種委員 会等の 状況 (過去 5年間 及び今 後予定 されて いるも の)	総会開催状況	2019年(主催地:プラハ) 2015年(開催地:ヘルシンキ)、 2011年(開催地:ナンシー)、 2007年(開催地:北京)、 2003年(開催地:オビエド)
	理事会・役員 会等開催状況	2017年(開催地:プラハ) 2017年(開催地:ザルツブルグ) 2015年(開催地:ヘルシンキ)、 2011年(開催地:ナンシー)、 2007年(開催地:北京)、 2003年(開催地:オビエド)、
	各種委員会 開催状況	本組織 DLMPST は、「アラビアの論理」「技術と工学の哲学」委員会をもつ。またこれら会議には開催のための諸委員会があるが、それらは、独自に会議を開催している。DHST と協力して、「コンピュータの哲学と歴史」「科学と文化の多様性に関する国際組織」「DHST-DLMPST 連携委員会」「教育委員会」をもつ。毎年の活動はそれぞれが独自の報告書を DLMPST に提出し、DLMPST 公式 Web page で公開されている。
	研究集会・会 議等開催状 況	総会以外の総合的な学術集会としては次のような会議があった。 2017年 <ul style="list-style-type: none"> ● Global Perspectives on Reasoning and Scientific Method. Workshop of the Division for Logic, Methodology, and Philosophy of Science and Technology. (日本の DLMPST Salzburg, Austria. 30 November & 1 December 2017 ● 2nd International Summer School for Sciences, History and Philosophy of Sciences, Technology, & Education. Lille, France. 11 & 12 October 2017. ● Symposium on Logic, Methodology, and Philosophy of Science and Technology at the World Humanities Conference. Liège, Belgium. 10 August 2017. ● Events funded by the DLMPST Small Conference Grants in 2017. 2018年 Conference on Mathematical Logic. A satellite event to the International Congress of Mathematicians 2018. Niterói, Brazil, 10-11 August 2018 2019年 Fourth SILFS Postgraduate Conference on Logic and Philosophy of Sciences Urbino, Italy, 3-6 June 2019年 Logic Colloquium, 5-10 August (DLMPSTの Association Member ASL と共催) 2019年 DLMPST-JAPS Tokyo Symposium on Fairness, integrity, Transparency in Formal Systems:: Challege for a Society increasingly Dominated by Technology その他にも、各年 small conferences 支援制度による支援を行っている。会員からの申請に基づき、審査が行われる。たとえば 2018 年には以下の 8 つの small conferences がサポートを受けた。支援金額は 1 会議あたり 800 から 1500 米ドル程度である。

様式第 2 (第12条関係)

		<p>○論理学・計算機科学関係</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Conference “The Mathematical Theories of Natural Language Processing”, special session of the International Symposium on Artificial Intelligence and Mathematics in Fort Lauderdale, FL, United States of America, January 6–8, 2014. 2. Conference “Functions, Proofs, Constructions”, in Tübingen, Germany, 21–23 February 2014. 3. Workshop “Semantics of cardinals”, at Ohio State University, United States of America, March 6–7, 2014. 4. Annual Conference “Applications of Logic in Philosophy and the Foundations of Mathematics” in Szkarska Poreba, Poland, May 5–9, 2014. Workshop “Logic and Computational Complexity”, in Vienna, Austria, July 12–13, 2014. 5. Workshop “Logic and Computational Complexity”, in Vienna, Austria, July 12–13, 2014. 6. “First Conference of the Croatian Logical Association”, in Zagreb, Croatia, originally planned May/June 2014. 7. Conference on Mathematical Logic. A satellite event to the International Congress of Mathematicians 2018. Niterói, Brazil, 10–11 August 2018.s <p>○科学哲学、科学方法論 関係</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. Conference on “Goodman, Pragmatics, and the Practical Turn in Philosophy of Science” in Nancy and Pont-à-Mousson, Frankreich, 8–14 September 2014. Workshop “Theory meets practice—Master class in science, engagement and policy making”, in Shine Dome, Canberra, Australia, December 5, 2014.. 9. Global Perspectives on Reasoning and Scientific Method. Workshop of the Division for Logic, Methodology, and Philosophy of Science and Technology. Salzburg, Austria. 30 November & 1 December 2017. 10. 2nd International Summer School for Sciences, History and Philosophy of Sciences, Technology, & Education. Lille, France. 11 & 12 October 2017. 11. Symposium on Logic, Methodology, and Philosophy of Science and Technology at the World Humanities Conference. Liège, Belgium. 10 August 2017. (その他の国際研究会議の詳細は DLMPST の HP を参照されたい。) この他、毎年 5 – 8 件の論理・科学哲学分野の Small conferences に支援を行っている。
<p>上記会議等への日本人の参加・出席状況及び予定</p>		<p>2020 年 DLMPST シンポジウム (東京) 150 人の予定 2019 年 総会 (プラハ) 20 人 (うち日本代表派遣団 4 人、分科会からの旅費補助 1 人) 2017 年 Executive Committee (ザルツブルグ) 日本役員 1 名</p>

様式第 2 (第12条関係)

		2015 年 総会 (ヘルシンキ) 20 人 (うち代表派遣 1 人) 2011 年、総会 (ナンシー、フランス)、6 人 (うち代表派遣 1 人) 2007 年、総会 (北京、中国)、5 人 (うち代表派遣 1 人) 2003 年、総会 (オビエド、スペイン)、5 人 (代表派遣なし)			
国際学術団体における 日本人の役員等への就 任状況 (過去 5 年)		役職名	役職就任期間	氏名	会員、連携会員の別
		Assessor	2016~2019	岡田光弘	(期) 会員・連携
		Assessor	2011~2015	八杉真理子	(期) 会員・連携
		vice president	2007~2011	内井惣七	(期) 会員・連携
					(期) 会員・連携
			~		(期) 会員・連携
出版物	1 定期的 (年 回) 主な出版物名 2 不定期 () 主な出版物名 Proceedings of the International Congress for Logic, Methodology, and Philosophy of Science				
活動状況が分かる年次報告等があれば添付又は URL を記載 DLMPST 公式ページ https://dlmps.org/ IUHPST/DLMPST の Website (http://www.dlmpst.org/) 上に、総会の議事録がアップロードされており、そこに活動報告が記されている。Past Congresses をクリックすると開かれる International Congresses の一覧から、当該年の Congress の General Assembly Minutes をクリックすることで閲覧可能。 また、IUHPST/DLMPST の初期の活動については、同 Website (http://www.dlmpst.org/) 上の History をクリックすると閲覧可能。 2019 年プラハ総会・コンGRES記録については、 Math. Log. Quart. 65, No. 4, 394-406 (2019) / DOI 10.1002/malq.201990001 に掲載されている。 https://onlinelibrary.wiley.com/doi/epdf/10.1002/malq.201990001 でも公開されている。 プラハ大会記録は次も参照： http://dlmps.org/pages/next-congress.php さらに https://onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1002/malq.201590003 には、ヘルシンキ大会での概略がまとめられている。					

様式第2 (第12条関係)

4 国際学術団体に関する基礎的事項 (内規第3条、4条、5条)

国内委員会 (内規4条第3号)	委員会名	IUHPST 分科会
	委員長名	木本忠昭
	当期の活動状況	(開催日時 主な審議事項等) 2017年12月27日 国際会議報告・参加報告書作成、新役員選出、 今期活動計画 2018年11月18日 IUHPST/DHST評議会、代表派遣、 その他活動 2019年12月28日 DHST 評議会の報告、DLMPST 国際会議 (CLMPST) 報告、代表派遣候補者決定、今後の活動、その他活動
内規第3 (国際学術団体の要件関係)	国際学術交流を目的とする非政府的かつ非営利的団体である <input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない ※根拠となる定款・規程等の添付又は URL を記載 (http://www.dlmpst.org/pages/statutes.php)	
	各国の公的学術機関及び学術研究団体等が国際学術団体に国を代表する資格を有して加入するものが、主たる構成員となっている (主たる構成員が、いわゆる「国家会員」であるか否か) <input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない ※根拠となる資料の添付又は URL を記載 (http://www.dlmpst.org/pages/statutes.php この article3 と article4)	
	下記の事項 (ア～エ) のいずれか一つに該当するか (該当するものに○印) <input checked="" type="checkbox"/> ア 個々の学術の専門分野における統一的かつ世界的な組織を有するもの イ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、統一的かつ世界的な組織を有するもの ウ 研究の領域が複数の専門分野にわたるものであって、ア又はイの国際学術団体を連合した世界的組織を有するもの エ 構成員のうち、各国代表会員がアジア地域等我が国が関係する地域等に限られるものであって、当該国際学術団体の研究の領域が複数の専門分野にわたるもの	
	10カ国を超える各国代表会員が加入している <input checked="" type="checkbox"/> 1. 該当する 2. 該当しない	
	加入国数及び主要な各国代表会員を10記載	(38ヶ国 12国際組織) 各国代表会員名/国名 Joan Leach / Australia、 Paul Weingartner / Austria、 Concha Martínez Vidal / Spain、 Qiu Renzong / P. R. China、 Karim Thébault / United Kingdom、 Helen Longino / U. S. A.、 Karine Chemla / France、 Benedikt Löwe / Germany、 Roberto Giuntini、 / Italy、 Adam Grobler / Poland